

阿波踊り起源説について

中村久子¹⁾

A STUDY ON THE ORIGIN OF THE AWA DANCE

Hisako NAKAMURA¹

ABSTRACT

In this study, the origin of the Awa Dance is examined by comparing the existing theories. Books and articles concerning these theories have been collected and are examined as summarized below.

1) The theory ascribing the origin to Shoryo Odori, a religious event observed during the Obon period to comfort the spirits of the deceased. This has been supported by many historians and folklorists.

2) The theory ascribing the origin to the celebration for the construction of the new castle. It states that, to celebrate the completion of the new castle, the first lord of the Awa Clan allowed townspeople of the precinct a free and easy night on which the dance was first performed. This is a widely acknowledged theory, but historians deny it, considering the situations at that time in detail.

3) The theory ascribing the origin to thanksgiving for harvesting crops. This theory says that the dance is to express the gratitude of the common people living on cereals for successful crops, and that the dance imitates actions for driving away harmful animals. Opinions in a similar vein, however, have not been proposed.

4) The theory ascribing the origin to Huryu Odori, popular around the end of the Age of Provincial Wars. This theory states that the forms and shapes of Bon Odori described in Kasugasaiki (Festival Records of the Kasuga Shrine) and those of Huryu Odori described in Miyoshiki (Chronicle of the Miyoshi Clan) are quite similar, and concludes that the Awa Dance originates from Huryu Odori. Although the forms and shapes of the dances described in Miyoshiki and Kasugasaiki are quite alike, Bon Odori described in Kasugasaiki is classified as kumiodori, not zomeki, the type of the present Awa Dance. Therefore, Huryu Odori cannot be considered as the origin of the Awa Dance.

1) 徳島大学総合科学部

*1. Faculty of Integrated Arts and Sciences,
The University of Tokushima*

5) The theory relating the origin to the spread along the Black (Japan) Current. This theory is based on the fact that many dances similar to the Awa Dance are found in Okinawa, Amami and Kagoshima Prefecture and says that the Awa Dance originates from the dances in fashion at the southern ports. But this theory itself was withdrawn by the theorist himself because of the differences of dancing rhythms. The southern rhythm is based on one beat, while the Awa Dance is based upon the so-called "Bon-ashi," two beat rhythm.

6) The theory ascribing the origin to "Eejanaika," a movement near the end of the Edo Era. The fact that this movement also spread into Tokushima area and the similarities of dancing forms and shapes led to this idea, but it can hardly be supported since Bon Odori had been being performed in Tokushima area before the "Eejanaika" movement.

In conclusion, the theory ascribing the origin to Shoryo Odori seems to be most convincing because the Awa Dance had been called Bon Odori till the end of World War II. More detailed investigation is being planned as to the theory relating the origin to the spread through the Black Current, especially about musical accompaniment and other similar dances. Regarding theories concerning Huryu Odori and Eejanaika, these dances should have influenced the Awa Dance, but cannot be considered as being its origin. The theory relating the origin to the construction of the new castle is considered impossible as many historians point out. Similarly the theory ascribing the origin to thanksgiving for harvesting crops is also untenable.

Key words: Awa Dance, Japanese folk dance, origin

1. はじめに

現在の阿波踊りが、戦前は城下町徳島の盆踊りであったことは広く知られている。この阿波踊りという名称は昭和の初期に生まれたといわれてきた¹⁾が、最近になって「立太子式祝典奉祝のため徳島署へ例の阿波踊りを三日間許可されたき旨願書差出したる」という大正五年十月の徳島日日新報の記事²⁾が見つかり、徳島の盆踊りが大正時代に既に阿波踊りと命名されていたことがわかった。

しかし、阿波踊りという名称が一般に広く使われるようになったのは戦後のことで、昭和23年までの徳島新聞で取りあげられた盆踊りに関する記事³⁾には「阿波踊り」という名称で記述されてはいなかった。同じ徳島新聞の翌24年の記事では「盆踊り」ではなく、全て「阿波踊り」という名称に改められていることから、この年を境に「盆踊り」を「阿波踊り」と統一して記述するようになったと考えられる。一般市民に「阿波踊り」の名称が浸透し始めたのはこの頃からであろう。

さて、この盆踊りがいつ頃、どのようにして踊られるようになったかについては、いろいろな説があり、その起源は定かではない。ところが、阿波踊りの起源について書かれたものをまとめてみると、いくつかの阿波踊り起源説に分類することができる。よく知られている起源説の中には歴史家にありえない説であると異義を唱えられているものもある。そこで、この阿波踊りの起源説について資料を収集し、それらを分類し、その真偽について検討を加えてみたいと考え、本研究に取り組んだ。

2. 研究の方法

文献研究：阿波踊りの起源に関する著作、記事等を収集し、阿波踊りの起源説を分類する。それらの起源説について肯定、否定の意見を加えて、起源説の真偽に検討を加える。

3. 研究の結果と考察

1) 精霊踊り説

飯田⁴⁾は、かつて阿波踊りが「阿波のボニ踊り」といわれたことから、阿波踊りは元来盆踊りからきているとし、松本⁵⁾も阿波の盆踊りから生まれたものであると次のように述べている。「阿波踊りは、阿波（徳島）の盆踊りから生まれたものである。盆踊りは、鎌倉時代の念仏踊りから始まったといわれる。盆の三日間、先祖の墓所から家の仏壇に帰っていた亡き人の霊を慰め、これを送る宗教行事の盆踊りは古くより庶民の中で生き続けてきた。」さらに、「盆踊りは精霊踊りである。精霊踊りをあやし踊り（霊を慰め、あやす意味）というが、日本の精霊踊りは阿波踊りのような行進形と回り踊りに二大別される。徳島では、同じ精霊踊りに属する行進踊りを正統の盆踊りと解釈し、回り踊りを精霊踊りと呼んで区別している⁶⁾」と書いている。

近藤⁷⁾は「盆踊りは盂蘭盆におどるものの総称で、念仏踊・題目踊・松阪踊・嵯峨踊・阿波の組踊の如きは皆それである。『二水記』には、永正十七年（1520）に京都ではじめて行われたことを記し、阿波では貞享元年（1684）に出された取締の禁令が残っていて、これによるとそれ以前から既に行われていたことがわかる。天明・寛政の頃（1781-1800）徳島の盆踊はおおむね丸踊で、組踊は少なかったが、天保初年（1831）には丸踊りが減びて組踊と俄が行われ、市中は勿論近郷に及んだ。天保十二年（1841）水野忠邦の改革によって禁止の厄に会い、嘉永元年（1848）にも同様禁令が出ている。文久の頃（1861）には組踊は跡を絶って、走り俄や「流し」「ぞめき」が行われた。明治十年（1877）頃には、評判所は既に影を潜め、改暦（1873）以後は旧暦七月十四日から三日間催され、これが郡部にも波及して行った」と述べ、阿波踊りの起源を精霊踊りに求めている。山本・田中⁸⁾も盆の精霊踊りから変化したと考えている。

金沢⁹⁾は徳島の盆踊りを「これはキチガイオドリとかイケソラとかいわれて街頭を狂うがごとく姿態をくねらせて踊る行進踊りである」と説明し、踊りの起源については、残された盆踊りの絵図から以下のように考えていると記している。「この行進踊りの源流については定説はなく蜂須賀氏築城祝いに無礼講を許したなどといいらわされているが、筆者はこれをやはり精霊踊りの変化したものと考えている。それは下記の理由による。この踊りの最古の絵画は徳島市新蔵町森甚一郎氏所蔵の鈴木芙蓉が寛政十年（1798）に描いたもので、この図の中心をなす人物はかさの下で音頭を歌っている人物である。かさは明らかに神位を象徴する天蓋であってこれはこの踊りが精霊踊りから変化したものだとする決め手である。また吉成腹亭（1807-1869）の嘉永年間（1848-1854）に描いた盆踊りの屏風（小松島市西野嘉右衛門氏所蔵）があって、年増女が長襦袢すがたなまめかしく、その女を中心にやはりかさをさしかけて行進している。私はこの二つのかさによって徳島の盆踊りもやはり精霊踊りの変化したものであると確信する」と絵画に残された傘の存在から阿波踊りの元は精霊踊りであるとしている。

この絵図について、槍¹⁰⁾は「徳島の盆踊り図は三点残されているが、寛政年間（1789-

1801), 文化年間(1804-1818), の二点は現行のものとは全然違った姿のものである。吉成菟亭(1807-1869)の屏風絵ではじめて現代の阿波踊りの姿を彷彿させるものになる。したがって、阿波踊りが種々の盆踊りの形を経て、ついに今の形に完結したのは幕末であるということが理解できる」と言及している。当時の盆踊りは、既に近藤が記したようにぞめき、組踊、俄、衣裳俄等種々あり、これについては三好¹¹⁾も同様に記している。しかし、文化年間の図は組踊りの図であるために、現在の踊りと違うのである。ぞめきが踊り継がれて、現在の阿波踊りになったといわれていることを考えれば、文化年間の図が組踊りを描いたものであっても、当時ぞめきが踊られていなかったと断定することはできない。

また、寛政年間の鈴木芙蓉作『阿波踊絵図』については、藤丸¹²⁾が「この傘を天蓋を象徴したものとみるか、風流傘とみるか、前者なら精霊踊りであろう、後者なら風流であろう」と述べているように精霊踊りの可能性はある。しかも、藤丸は図中左に描かれた人物を音楽担当グループとしており、中央で踊っている五名は右手右足、または左手左足を出し、阿波踊りと同様にナンバの手足であることから考えると、槍が述べたように寛政年間の絵が現在の踊り姿とまるで異なるとは考えられない。

ところで、金沢¹³⁾は「阿波踊り考現学」の中で、両絵図に描かれた傘の意味について、具体的に解説し、「一体、雨がふらないのに盆踊りになぜ雨傘が必要なのであろうか。またなぜ画家はこれをかかねばならなかったのであろうか。この解釈は民俗学の説明によるときわめて簡単である。すなわち日本でも、中国でも、神は天蓋によって被護せられねばならぬ信仰があった。要するに古くかくれみの、かくれがさの故実につながる一かくりみ(隠身)なのである。いまま葬式の棺には天蓋をさしかける。神はつねに人間と隔絶した存在であることを象徴したものである。そもそも盆踊りなるものは彼の国(ははの国)に在まし給う祖霊神が一年一回この土を訪れ給う。それを迎え奉る儀式であった。それがだんだん形骸化し、果ては年中行事の享樂の一つと化した。さすがに発生の起源は残骸をとどめてこの雨傘となったのである。それでいままなお、阿波の山奥で行われているまわり踊りでは中央に床几を出し、その上の片手に雨傘をさした音頭出しが上がって音頭をとりつつ浄るりくずしを唱う。それにあわせてぐるりぐると踊り子はまわるのである」と、民俗学の立場から言及している。

先に、藤丸が述べたように絵図に描かれた傘が天蓋を象徴するものか、風流傘とみるかについてはどちらとも断定できないが、以上のように、阿波踊りを昭和23年頃まで「盆踊り」と呼んでいた事実及び、盆踊り絵図に描かれた様子から考えても、精霊踊り説は最も妥当な説であると考えられる。

2) 築城落成説

観光ガイドブック「阿波のあれこれ」¹⁴⁾¹⁵⁾には、阿波踊りの起源について「一番多く云われているのは、天正13年7月15日初代藩主蜂須賀家政公が市内城山に徳島城を築き翌14年落成したので、そのお祝いに城下の町人達に無礼講の夜を催したのが行事化したものと云われ踊りそのものは以前から踊られていた」と記載されている。

林¹⁶⁾は「蜂須賀家政が入國して長曾我部の乱を鎮めた恩賞によって豊臣秀吉から阿波一國を賜り現在の城山を修復して移ったのが天正十四年とある。そこで付近に住む人達は初めて偉い殿様を迎えたお祝に踊たのが抑も阿波踊の起源である」と言い傳えている。但しその頃はまだ家庭に三味線なんて有ろう筈はなし思うにわっしょわっしょと手振り足ぶりし

て面白うに踊ったぐらいであろう」と述べ、築城祝いに付近の住民が踊り、後に、家政以後の代々藩主がお盆の精霊踊りとして擁護したと述べている。

飯田¹⁷⁾は「この説は、昔から城下町徳島の市中に伝えられていたと言うが、文字で記録せられたのは、管見の範囲においては石毛賢之助(栢川)著『阿波名勝案内』(明治41年)の「徳島市之部」をもって最初とする」と記している。

そこで、石毛¹⁸⁾の「阿波名勝案内」を見てみると、「阿波盆踊 徳島市に於ける盆踊は、全国各地の盆踊とは全たく其趣を異にし、平素祝賀の際猶踊るを得べき一種異様の盆踊なり、其濫觴は蜂須賀家政阿波國に封ぜられ、渭山築城の工事竣りを告げたる日、特に無禮を許して上下一齊に祝賀の盃を挙げ、狂歌乱舞二日に亘りたり、爾來毎歲七月十五十六の兩日之を催ふし年を重ねるほどに奢侈の風を長じ、男女入交りて之を行ふに至り、其取締法さへ設けられて、今日の盆踊とは又 其趣を異にせるものありき、兎まれ祝賀の際之を行ふを得べき我阿波國の盆踊は、世の所謂盆踊の廃絶の運命に逢着するの日、猶其余命を保ちて徳島の古き年中行事を紀念するを得べし」と書かれている。

石毛の説に対しては、三好¹⁹⁾(1980)が「ジャーナリストの石毛氏は、阿波踊りを観光資源化しようとした最初の人といえようか」と記し、「蜂須賀家政が阿波守となったのは、天正十三年(1585)夏のことで、その直後に領内の太閤検地に取りかかった。この検地は有力な領内の旧勢力の土地を、現実の耕作者に分け与え、農業に専念させて直接に支配し、確実に年貢を取り立てようとする目的をもっていった。当然家政と百姓たちの間にあって、年貢のピンハネをやっていた有力農民の土地を没収したり、削除することもあったし、土地から切り離して藩士の列に加えるか、百姓の身分に固定して、他の百姓たちと同列の地位に固定するという、兵農分離を実現しようとしたが、それに反対する山間部の土豪たちは、武装してはげしく家政に抵抗した。前後六年もつづいたこの土豪一揆は、新領主家政をたっぷり苦しめた。また同十五年の九州征伐から文禄・慶長の役まで、秀吉の命令に応じて領内に大量出兵しなければならなかった。家政の苦惱は深まるばかりであった。そんなとき徳島城は落成するのだが、この城も工事をいそいだため、一宮城や勝瑞城の廃材を利用して行った。そうしたことからいっても、祝賀踊りを城下で催したということは、あるはずもなかったように思える」とこの説を否定している。

さらに三好²⁰⁾は、「地域の歴史像」の中で「藩の家老長谷川越前は、寛永十七年(1640)に城下町徳島を取り締まる町奉行に対して、『蓬庵様より屋敷地を下されたき町人共、望み次第に御屋敷を下され候、よって直ちに普請させるよう』と命じている。蓬庵は蜂須賀家政のことで、天正十三年(1585)の初めの入国から五十五年後に、いまだ城下の商業地区に、思うように町人を集めて、商業活動を活発に展開できないでいるのだ。こんなありさまが十七世紀中ごろの実情だから、徳島城が落成した天正十四年ごろの徳島城下には、ほとんど町人たちの町並みも見られず、一握りの特権商人たちが、祝賀のために城に呼ばれたということもあり得ても、狂喜乱舞するなどというのは、あまりにも不自然なことである。何よりも、領内では藩政に立ち向かう山間部の一揆に手を焼き、九州征伐をも控えたこの時期に、のんびり阿波踊りなど、どう考えても結びつくものではない」と記述している。

踊り唄であるよしこの節の中で「阿波の殿様、蜂須賀公がいまに残せし阿波踊り」とうたわれていることなどから、この説は広く行きわたっているが、前田²¹⁾三原²²⁾等も石毛

著の「阿波名勝案内」が築城落成説のはじめであると述べ、引用した出典が明らかにされていないことから、単に伝説をまとめたものであるとして、この説を否定している。

檜²³⁾は、阿波踊りと同様に乱舞として名高い三原やっさ（広島県三原市）の起源についての伝説に小早川隆景が三原城建設の時、僚友の蜂須賀家政の領地阿波から人夫の供給を受けた際に阿波人夫の謡ったものがこの地に残ったとある説をあげ、「民謡で有名なさんさ時雨が伊達政宗の作であったりするように、民謡や盆踊りの権威づけをするために藩主の名前が引っ張り出される」と述べている。

朝日新聞徳島支局発行の「阿波おどりの世界」²⁴⁾には、「徳島城の歴史を調べていた河野さんは、まだ戦国の血生臭さが漂う天正年間に、機密の多い城内が民衆に開放され、そこに乱舞の渦ができるなどありえないことと考えた」と記載されている。また、河野氏が1979年に徳島市観光協会作製の観光案内にクレームをつけ、観光案内の文面が年ごとに築城落成説から築城落成説かどうかかわからない曖昧な文章に変わったとも書かれている。築城落成説は、行政が観光を推進する立場から出版された本には必ずといっていいほど掲載されていることからみると、檜が書いていたようにこの踊りを権威づけたい気持ちが伝わってくる。しかし、歴史研究者は概ねこの説についてはありえない説であるとしており、「阿波おどりの世界」にも「今は歴史家を称する人の中でこの説を支持する人はいない²⁵⁾」と書かれている。このように築城落成説は世の中に広く知られておりながら、歴史的にあり得ないとされる説である。

3) 収穫感謝説

前田²⁶⁾は「阿波踊りがほかの踊りと変わっている点は、行進踊りであることだ。これは石山、笹山踊りであって、道のあるなしを問わず、いのししを追い払う真似踊りであるから『ホーイ、ホーイ』とどこまでも行進するのである。両手の動かし方も、いのししを追う手振りそのまま、両足も石山、笹山を通る困難な歩法だ」と、進もうとして進まれぬ状態が足取りにもあらわれていると述べている。さらに、収穫を害する悪獣を追い払う物真似踊りによって、雑穀を食べる庶民階級の収穫感謝の踊りであると主張している。

三隅²⁷⁾は念仏踊りが死者供養の目的で行われたことのほかに、農山村では念仏踊りが田畑や部落にたたる、さまざまな御霊を鎮圧する呪術としての目的があったとし、「有名な徳島の阿波踊りなども、もと田畑を荒らす猪を追い払うために始めたという伝えがあり、あるいはこれも、害獣に化身した怨霊の鎮送を祈る念仏踊であったかと思われる」と述べている。猪を追い払うために踊られたという点では前田の説も三隅の説も似ているが、前田の説は収穫感謝の踊りであり、三隅はあくまでも鎮魂の踊りとしてとらえているところが異なる。

盆踊りが祖先の霊を供養するのではなく、悪獣の霊を慰めるのでもなく、悪獣を追い払う物真似踊りによって収穫を感謝するという説は他に見あたらない。また、この説を支持する意見もない。

4) 風流踊り説

三好²⁸⁾は「阿波踊り起源説の中には、藩政初頭ではなく、戦国末期の勝瑞城で行われている風流おどりの記録をもって、阿波おどりのはじまりだとする説がある」と述べ、今日の阿波おどりにとって、この風流踊りがその原型となるものかどうかを検討するのに、次の史料を用いている。

『三好記²⁹⁾』下巻六 風流之事

七月十六日の空もはや、秋風涼しく吹き通ひ、光も静かにほのめき渡れば、十河存保公躰を見物あるべきために、仮屋形を結構に作らせ、座席尋にかまへ、存保公居直り給へば、御前には老従各二、三人居たり。其外には荒川越中・五十嶋將監・工藤才一郎・有岡長五郎・吉良藤三郎・岩越左門・小林長七・南条寿濟・各席を忠しく有りければ、何も諸侍御棧敷の前後にあり。国中の男女老若に至るまで、今此時と見物す。芝居の騒ぎを静めんためにや、赤頭をかつぎ、棒を持ち、其身輕げに出立たる者、十人ばかり走り出ず。群衆の鳴を静めれば、蓬來の嶋共云ひつべき、色々の厳しき玉の枝生茂りたる山を作り、地車にのせて力者百人ばかりにて、今やうを謡ひて引渡し、其次には隠蓑・隠笠・打出の槌などと聞へし物を通し。竜宮世界の重宝とて、品々名も知らぬ宝と聞へし物を持って通り、其次には大躍の人数六、七十人、十河額に抜立はなし、元ゆいのうえを洗手拭をよりて、二重にまわして鉢巻にし、洪染のかたびらの背に松の葉を染付けて着し、黒き綾の帯に、二尺一寸の大脇指に、角つばをかけ、紅の下緒の付柄をば、八幡黒革を以て、金鮫の上を巻き、さやをば銀のし付にしてだてに指し、手拍子を打ち、今やうを謡ひ出づ。歌七、八篇謡ひ、場ならしをしてぞ納めたり。其次は小躍の人数五十人、年の程十六、七に、廿のうち、振よき子供をえり勝って、金の作り花指したる扇笠をきせ、紫染の衣にて顔を包み、白き肌着に京染のひとへ衣を着、はくの帯を結び、皆紅の扇に金銀を以て、日月をかきたる扇を持ち、腰には幣ぐしを指し、白革の足袋に草履をはき、中躍十余人、品々の鳴物をならし、何れも様子だてに拵へ、拍子面白く打ちならし、謡ひ出し、一躍さらりと躍りて引足になる処を、今一躍と所望あれば、又引返し、持ちたる扇をば腰に指し、幣をぬき持ちて、御世は千年松の葉の、散りうせぬ身の榮へ行く、神の誓ひぞ目出度きと、押返々々、足拍子静かに踏揃へ、躍納めたる処は、誠に世の憂さをも忘れて、離苦得楽の世界に生るるかとぞうたがはる。

この史料から、三好が「天正六年(1578)の勝瑞城における風流踊りが阿波踊りの源流とは断じ難い³⁰⁾」と述べ、その理由を「まずこのような記事が、この年にだけ記録されていることはきわめて特殊な催しであることを示している。恒例の踊りとは決して考えられない。そうすれば、三好長慶の仲介によって、踊り子が上方から来たという説もうなずける」としたのは1980年である。

読売新聞徳島支局編の『阿波おどり物語』³¹⁾にも風流踊り説が紹介され、「盆行事で見物席をつくったり、見物人を意識したり作法が、阿波おどりと共通の要素を含んでいたため」風流おどりが阿波おどりの起源に結びつけられたと書かれている。しかし、ここでも「三好記を刻明に読み、その描写ぶりから判断すると、やはり阿波踊りとは異質な中世文化の演劇とみる方がよいようだ」と風流おどり説は否定されている。

松本³²⁾もその著『阿波踊り』の中で「寛文三年(1663)福島玄清による阿波国管領だった三好族の興亡を記録した『三好記』によると、天正六年(1578)七月十六日、当時の阿波国の中心地、勝瑞城(板野郡藍住町)で「十川存保が風流の催しをした」とある。存保は、足利幕府の実力者、伯父の三好長慶の助言で京都から猿楽座を来演させ、領民にも見物さ

せた。華美の衣装で百人余の踊り子が手拍子を鳴らし今様を歌いながら練り踊った。この風流踊りを阿波踊りの起源とする考証もあるが京の雅に比べ、異質な阿波の盆踊りは、草の根から芽吹いた庶民の踊りであろう」と述べ、やはり風流踊り説を否定している。

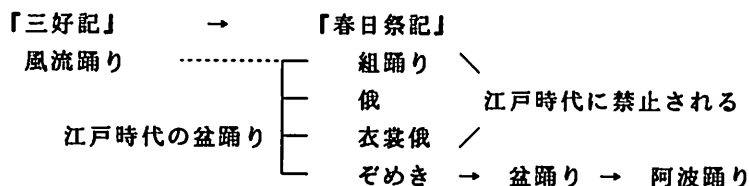
「風流」については日本風俗史事典³³⁾に「豪華華麗な装飾や造物、さらにはそれらを特色とする群衆的行動をいうようになり、ついに囃物すなわち踊を意味するに至った。平安時代にはじまった風流は、金銀珠玉などを用いて、衣服や調度など種々の物に、物語や詩歌の心を意匠化した趣向をめぐるものが中心であった。この風は、賀茂祭をはじめとする祭礼などで都人士女の注目を集め、公家貴族からしだいに民間に及んだ。こうして、中世にかけてさまざまな機会に衣裳を飾り、造物を持ち出して練り歩くことが流行した。異装の集団が踊り巡ったやすらい花は、人体による奇抜な意匠であり、祇園祭の山鉾は、造物のきわみであった。これらは、時とともに豪華に流れ、群衆行動として示威の意を含む場合も少なくなかった。風流は、このためしばしば政府の禁じるところとなったが、御霊振興と深くかかわりつつ展開した。なかでも目をそばだたせたのが風流の踊で、造物で飾りたてた花笠、大黒や夷といった仮装の者を中心に、にぎやかに歌舞する囃物が地域や職域単位に組織され、大いに盛行した。正月の松囃、盆の念仏踊はその代表であり、祭礼や物詣にも囃物がつきものとなった。いまも数多く伝えられる各地の浮立・念仏踊・太鼓踊・小歌踊などは、いろいろ変化したが、いずれも風流の流れをひく民俗芸能である」と説明されている。日本文化史辞典³⁴⁾には「踊り風流の華やかさは室町時代から芽生え」とあり、藝能辞典³⁵⁾の郷土舞踊の風流についての項では「こうした風流の踊は、今も諸国に伝播し、様々の変化を以て行われている。いわゆる郷土舞踊の大半は、この風流脈のものといってよい」と記載されている。

「風流」が各地の念仏踊りに影響を与えてきていることを考えると徳島の「盆踊り」が風流の影響をうけて変化したものである可能性は認められるものの、日本風俗史事典に書かれたように造物で飾りたてた花笠、大黒や夷といった仮装の者を中心ににぎやかに歌舞する囃物が地域や職域単位に組織されたものは盆踊りとしては組踊りや俄に近いのではなかろうか。

ところで、後に(1994年)、三好³⁶⁾は先の説を翻し、『三好記』に加えて、『春日祭祀』も分析することにより、風流踊りが阿波踊りの源流ではないかと結論づけている。彼は『三好記』について「この史料は戦国の末期に阿讃の守護細川持隆の被官であった二鬼島道智(1565-1653)によって書かれた三好家の盛衰の歴史書(寛文三年刊で福長玄清撰とある)で、そのなかに風流踊りに関する、かなり詳細な記事は注目される」とし、さらに『春日祭祀』には、「慶安三年(1650)に行われた徳島城下の春日神社祭礼に、氏子である新町の十四の各町がくり出した組踊りについて詳しく記録された史料である。この史料から戦国末期の勝瑞城において演じられた風流踊りの芸態が、近世初頭の徳島城下に踏襲されている状況を推察することが可能なように思われる」と示している。

三好が『春日祭祀』から読み取った踊りは十四の各町がくり出した組踊りについての記録である。江戸時代の盆踊りを構成した一つが組踊りであるが、文政期の「徳島孟蘭盆組踊圖」に見られるように、大がかりなもので、踊りというよりは芝居に近いものであった。江戸時代にたびたび出された盆踊り禁止令はこの華美に流れた組踊りや俄についてであった。一方、ぞめきは組踊りのように大がかりなものではなく、組踊りが禁止されてもぞめ

きは許されていた。明治、大正、昭和と踊り継がれてきた盆踊りがぞめきの流れであることを考えると、「三好記」に描写された風流踊りと「春日祭記」の盆踊りが同じ流れを汲むものである可能性は高いが、風流の遺物やはでな衣裳、仮装などは阿波の盆踊りの中でも、組踊りや俄に近く、ぞめきとはややかけ離れているようである。以上のことは、以下の図のようにまとめられる。



三好の説は風流と組踊りの流れを同一とするものであり、風流と現在の阿波踊りの流れを一つにするには無理がある。ところが、芸能史研究会編の『日本芸能史4巻³⁷⁾』には、天正四年以後の風流踊りについて、大がかりな趣向や拍子物の姿は消え、風流の芸態がすっかり踊り中心になり、大風流傘を中心に踊るさまを、完成をみた風流の姿であるとしていることをあげて、三好は徳島城下の盆踊りを描いた鈴木芙蓉、吉成葭亭の作品と「徳島盂蘭盆会組踊之図」に風流傘が描かれていること、そして、風流が変容してきていることから阿波踊りの源流が中世末に流行した風流踊りに求められる³⁸⁾としている。

絵図に描かれた傘を風流傘とみるか天蓋とみるかについては結論がでない。各地の念仏踊りが風流に影響されたことを考えると、阿波の盆踊りが風流に影響を受けていることはあり得る。しかし、風流踊りがこの地に根付いて盆踊りになったとするには、これらの資料からは言い難い。

5) 黒潮伝播説

槍³⁹⁾は「人はよく言う、沖縄のカチャーシーは阿波踊りにそっくりだとか、また奄美の踊りが阿波踊りによく似ていると。私の頭の中にひらめいたのはそれら南島の芸能、まだ見たことのない芸能の幻カチャーシーにこうしなければならないという踊りの約束ごとはない。エイサー(沖縄の盆踊)の後とか宴会のおひらきにはこのカチャーシーが踊られる。何となく阿波踊りとカチャーシーはよく似ているようである。宴会のおひらきには阿波踊りがよく踊られるし、徳島の各地の盆踊りでも、昔ながらの輪踊りを踊った後では阿波踊りを踊るようになった所が多い。・・・友人の好意によるカチャーシーを見ながら、違う、と私は思った。カチャーシーはあくまでカチャーシーであって、阿波踊りと軌を一にするものではない。カチャーシーと阿波踊りは違う、それでは、どこがどう違うのか」と阿波踊りとカチャーシーの類似に注目しながらも、直感的に異質なものであると判断している。

また、槍⁴⁰⁾は「沖縄のよく似たものは「カチャーシー」という踊りであり、奄美のものは「六調」という踊りであろう。これらの踊りは、阿波踊りと共に「乱舞」と呼ばれているものである。・・・ただ、南島系の乱舞と、阿波踊りが違う点が二つある」と述べ、阿波踊りに見られる特性の一つとして、阿波踊りの起源が死者の霊を村境まで送って行く、古い日本の精霊踊りの一つであること、二つ目が、阿波踊りはいつも二拍のリズムを刻んで踊ることであるとしている。さらに、「九州から八重山群島まで、この二拍のリズムを

探して島々を巡ったが、足が阿波踊りのように二拍のリズムを持っている所はほとんど無かった。一拍のリズムの野放図さ、あるいは固定化ではなく、二拍のリズムの上にこの芸能を結晶させ、他の動き（振付）を寄せ付けない所に、いつまでも新しく、長い生命を持ち続けてきた阿波踊りの秘密があると言えよう。ちなみに、この二拍の単調なリズムに終始するのは日本の民俗芸能の最も古い型に属するものである」と述べ、阿波踊りと沖縄のカチャーシー、奄美の六調との類似点や相違点について指摘している。

檜はその後、四国放送開局四十周年記念番組の中で、黒潮に乗って、沖縄のカチャーシーや奄美の六調のような乱舞が徳島に伝わり、阿波踊りとなったのではないかと検証した。しかし、翌年の徳島県郷土文化会館主催の「阿波踊り講座」で、カチャーシーや六調の延長に阿波踊りをおいて考えてきたが、誤っているとその考え方を自ら撤回した。

それについて、岡田⁴¹⁾は「民俗芸能研究家・檜瑛司氏が阿波おどりのルーツをたずねて九州各地、奄美、琉球を調査されたことがあります。ハイヤ、カチャーシーなどが阿波おどりのルーツ線上ではない、という結論になったのは足の運びが違うこと、即ち2ステップでない点でした。前後に踏んだり変化はそれぞれにあります、盆足でないことです」と説明している。

朝日新聞徳島支局編の「阿波おどりの世界」でもカチャーシー、六調、鹿児島ハンヤ、三原やっさ、海部のうちわ踊り等、阿波踊りとよく似た踊りをとりあげ、「共通の土台の上に、様々な文化を吸収して、それぞれ独自の形を作り上げたのだろうか⁴²⁾」と黒潮伝播説に疑問を投げかけている。

小島⁴³⁾はリズム感の性格を（水田稲作農耕民の静かなリズム感、海洋漁労民のスイングするリズム感、山村稲畑民のダイナミックなリズム感、狩猟民のビート感のあるリズム感、牧畜民の予備的弾みを持った強迫弱拍のリズム感の）五つにわけて生活形態とリズム感の関係についてまとめているが、それによると、阿波踊りは海洋漁労民のリズムが水田稲作農耕民のリズムに強く影響されているリズムということになる。

阿波踊りのリズムはハイヤ節からきている⁴⁴⁾といわれているが、そのハイヤ節⁴⁵⁾は南から貿易船によって九州の牛深に上陸後、太平洋岸沿いと日本海沿いに分かれて、各地の港町に流行して、ハイヤ節、ハンヤ節、アイヤ節、果ては佐渡おけさにと変身している。そのことからみれば、リズムだけでなく、踊りも北上して各地に残されたと考えられることもできる。

しかし、阿波踊りのメロディである「よしこの」が潮来節⁴⁶⁾からきていることから考えると、もともと踊られていた踊りに流行のリズムや流行のメロディが取り入れられて、その時代の流行に左右されて踊り続けられたことも考えられる。今後、ハイヤ節系のリズムとそれらを伴奏にして踊られている踊りについて調査をすること、阿波踊りによく似ているといわれる県外の踊りについて詳しく調査することにより、この説についての考証が進められるであろう。

現在のところでは、檜のいうように、カチャーシーや六調に盆足が認められないことから、同じルーツの線上にあるとはいえない。しかし、小島のいうように、海洋漁労民のカチャーシーが徳島に上陸してから、水田稲作農耕民の盆踊りとなり、足取りも盆足となったと推定することはできる。黒潮に乗って踊りが伝わってきたという説は撤回されているが、今後資料を集めて検討したい。

6) ええじゃないか説

読売新聞徳島支局編の「阿波おどり物語」には「慶応三年八月、大阪に神の御札が舞い降りた、とのうわさが、うわさと呼び、関西一帯に「ええじゃないか」を連呼する群衆の踊りが巻き起こった。・・・という話が、当時の古い本にはいっぱい記録されている⁴⁷⁾」とあり、それが徳島にも鳴門海峡を越えて伝わったと記されている。そして「もともと阿波には、伝統的な阿波踊りの下地がある。踊りも堂に入ったもので本調子だ」とも書かれ、さらに、「『ええじゃないか』の踊り方を分析して「人間の歩行動作とは逆で、いわゆるナンバ型である」としている。また、「阿波踊りもナンバの行進形が特徴となっており、一つの接点を見いだすことができる」と「ええじゃないか」と阿波踊りの類似点をあげ、さらに、「古老の間で伝承されるものに、『いまの気違い踊りは、ええじゃないか、からきとると聞いている。踊り好きな人が、ええじゃないか踊りをみせてくれたことがあるが、これが気違い踊りに変化した』といていた」と「ええじゃないか」が阿波踊りの起源であるような古老の話⁴⁸⁾も記載している。「ええじゃないか」が徳島に伝わって、誰言うとも無く踊ったことに関しては山口⁴⁹⁾、三好⁶⁰⁾も述べている事実である。

「阿波おどり物語」では、「ええじゃないか」が気違い踊り（阿波踊り）に変化したとの古老の話を載せているが、もともと伝統的な阿波踊りの下地があったとも書かれており、伝統的な阿波踊りの下地があったのなら、「ええじゃないか」が阿波踊りの起源であるはずはないのである。慶応三年以前に現在の阿波踊りの形態で踊られていたであろうことは、吉成葎亭が描いた嘉永1848年頃の「徳島城下の図」等で明かである。ということは、阿波踊りに似た「ええじゃないか」が関西から阿波の地に広まったが、時とともに消滅しただけであって、当時を幼児体験した人々にとっては、消え去った「ええじゃないか」が阿波踊りに似ていたという記憶として残ったのだと思われる。

松本⁶¹⁾は「ええじゃないか」の踊りの合唱や形態は、今の阿波踊りに酷似しているとし、「組踊りは、藍師らが庶民大衆を動員しての経済力の誇示であり、ええじゃないかは、世直しの民衆のデモ行動である。幕末維新前夜、庶民は「なんでも、かんでも、ええじゃないか」と叫び、阿波踊りの原型を誕生させたのだろう。」と述べている。一方、三好⁶²⁾は「幕末になると阿波踊りは大変革を遂げる。いわゆる『ええじゃないか』の影響である。・・・この流行によってそれまでニワカが主体だった阿波おどりは、現代のようにテンポの早い組踊りに変容したものと見られている。踊り歌に『池又菓子屋じゃ、日の出は餅屋じゃ、一丁目の橋までゆかんかこいこい』というはやし歌が残っているが、これは「ええじゃないか」で踊り込んだ商人の家であろう」と、「ええじゃないか」が阿波踊りに影響を与えていることを記述している。同様に、山本・田中⁶³⁾は「お蔭まいり」の影響も加わって、阿波踊りが狂乱踊りへと転化したと述べている。

「阿波おどりの世界」は「ええじゃないか」をきっかけに、「それまでテンポの遅い盆踊りだった阿波おどりが熱狂の乱舞の要素を取り入れ、今の形になった」と「藍の館」館長三好昭一郎の意見が、また、高橋敬・県阿波踊り協会徳島支部事務局長の「『ええじゃないか』があったからこそ阿波おどりが自由と独創を求めようになり、踊りが民衆の間で一層広まるきっかけになった⁶⁴⁾」という考えを添えることにより、「ええじゃないか」による阿波踊りに対する影響を指摘している。しかし、二人に続いて福原健生・徳島市文化振興課長の「むしろ、阿波おどりの素地があったからこそ、『ええじゃないか』が徳島

で盛り上がった」のではないかという推測も付け加えられている。これらのことから、阿波踊りが「ええじゃないか」による影響は受けたものの、慶応三年に流行った「ええじゃないか」自体が阿波踊りの起源であるとは考えられない。

4. まとめ

精霊踊り説は、多くの歴史、民俗学研究者が支持する阿波踊り起源説である。昭和23年までは「盆踊り」と呼ばれていたことから、他の多くの盆踊りと同様に、宗教性を失って年中行事として定着したと考えることができる。現在の踊りに近い形態で踊られたのは、遅くとも嘉永(1848年)頃の絵図であるという説は納得できるが、寛政(1798年)頃の絵図も現在と同様に音楽グループと踊りグループに分かれていること、ナンバの手足で踊っていることなどから、今から二世紀前に同様の形態で踊られていたと考えられる。精霊踊り説を支持する歴史、民俗研究者は江戸時代以前から踊られていたとしている。

築城落成説は、歴史研究者の間では支持されていない起源説である。盆踊りやその伴奏音楽が藩主によって創られたり、保護されたりしたという言い伝えは他の盆踊りにも見られることであり、盆踊りの権威づけとして広まった説であると考えられよう。

収穫感謝説は雑穀を食べる庶民階級の収穫感謝の踊りが阿波踊りの起源であるとされ、猪を追う身ぶりから生まれたという説である。この説については、肯定の意見も否定の意見も見られず、信憑性はない。

風流踊り説は「三好記」に見られる風流踊りが阿波踊りの起源であるとする説であるが、芸態が阿波踊りとは異なるという理由で、いくつかの否定的な意見がみられた。しかし、「春日祭記」に見られる芸態とよく似ているという理由で阿波踊りの起源ではないかという新しい説が浮上した。しかし、「春日祭記」に書かれた盆踊りは江戸時代に禁止された組踊りであり、阿波踊りの流れを汲むぞめきではない。このことから、風流の影響をうけた可能性はあるが、風流踊りが起源であるとは言い難い。

沖繩のカチャーシーのような乱舞が南から伝わってきたとする黒潮伝播説はすでに撤回された説ではあるが、ハイヤ節系のリズムが南方から伝わって阿波踊りのぞめきのリズムになっていることを考えると、資料を集めて、今後もさらに検討したい説である。

「ええじゃないか」が徳島に伝わってきた事実と、その踊り方が阿波踊りに類似しているということから「ええじゃないか」が起源であるとする説については、「ええじゃないか」以前からすでに徳島で盆踊りが踊られていたという事実から、起源である可能性はないと考える。当時の盆踊りに「ええじゃないか」が影響を与えたという意見については、大いにあり得ると考える。

以上のように、阿波踊り起源説を分類してみたが、阿波踊りが戦前に「盆踊り」と呼ばれていたことから、精霊踊り説が最もうなずける説である。黒潮伝播説については伴奏音楽や阿波踊りに類似している他の踊りを調査して、さらに、考証を深めたい。風流踊り説とええじゃないか説に関しては、阿波踊りの起源というよりはむしろ阿波踊りに影響を与えたと考えた方がよいであろう。築城落成説については多くの歴史研究者が否定するようになり得ない説であると考えられる。収穫感謝説についても同様に考える。

引用文献

- 1) 仲井幸二郎編(1981):阿波踊, 民俗芸能辞典, K.K.東京堂出版, p.24.
- 2) 板東愨夫編(1994):こんなもの見つけた, 阿波おどり第2号, 板東愨夫編, 阿波おどり研究会, 徳島, p.17.
- 3) 中村久子(1993):附表「阿波踊りに関する新聞記事」, 徳島大学総合科学部健康科学紀要第五巻, pp.21-31.
- 4) 飯田義資(1964):阿波踊り, 阿波風土記 徳島郷土双書4, 湯浅良幸編, 徳島県教育会出版部, pp.46-47.
- 5) 松本進(1980):踊りの起り, 阿波踊り, 徳島市観光協会, 徳島, p.18.
- 6) 松本進(1980):神と仏への祈り, 阿波踊り, 徳島市観光協会, 徳島, p.20.
- 7) 近藤辰夫(1930):郷土雑考, 近藤辰郎, 徳島, pp.1-4.
- 8) 山本大・田中歳雄(1977):風土と歴史 10 四国の風土と歴史, K.K. 山川出版社, 東京, pp.299-300.
- 9) 金沢治(1974):盆踊り, 日本の民俗 徳島, 第一出版法規K.K. 東京, pp.160-163
- 10) 檜瑛司(1982):徳島の民俗芸能, 徳島の研究7 民俗篇, 石塚胤夫・高橋啓編, 清文堂出版株式会社, 大阪, p.139.
- 11) 三好昭一郎(1980):徳島藩と阿波おどり, 阿波おどり, 徳島新聞社編, 徳島新聞社, 徳島, p.172.
- 12) 藤丸昭(1980):阿波踊り絵図〈鈴木芙蓉〉, 阿波おどり, 徳島新聞社編, 徳島新聞社, 徳島, p.24.
- 13) 金沢治(1970):阿波踊り考現学, 徳島案内, 福家健二編, 徳島県教育出版部, pp.32-33.
- 14) 観光ガイドブック(1978):民謡と民芸, 観光ガイドブック 阿波のあれこれ, 徳島県観光課, 徳島, p.38.
- 15) 観光ガイドブック(1975):民謡と民芸, 観光ガイドブック 阿波のあれこれ, 徳島県観光課, 徳島, p.59.
- 16) 林鼓浪(1953):阿波踊, 玉村印刷所, 徳島, pp.1-3
- 17) 飯田義資(1964):破邪啓蒙三条, 阿波踊り, 徳島県教育会出版部, 徳島, pp.57-58
- 18) 石毛賢之助(1979):阿波盆踊, 阿波名勝案内, K.K 歴史図書社, 東京, pp.37-38.
- 19) 三好昭一郎(1980):阿波踊り起源説をめぐって, 阿波おどり, 徳島新聞社編, 徳島新聞社, 徳島, pp.207-208.
- 20) 三好昭一郎(1981):阿波踊り考, わたしの地域史1 地域の歴史像, 教育出版センター, 徳島, pp.5-6.
- 21) 前田正一(1952):阿波踊りの起源 伝説の落成祝説, 徳島新聞記事 S27.8.12, 徳島新聞社, 徳島.
- 22) 三原宏文(1976):阿波おどり実記, 三原武雄, 徳島, pp.1-4.
- 23) 檜瑛司(1980):謎を秘めた阿波踊り, 阿波踊り, 徳島新聞社, 徳島, pp.245-246.
- 24) 朝日新聞徳島支局(1992):阿波おどりの世界, 朝日新聞社編, 朝日新聞社, pp.90-91.
- 25) 同上.
- 26) 前田正一(1952):阿波踊りの起源 月を仰いで猪追い, 徳島新聞記事 S27.8.13, 徳島新聞社, 徳島.
- 27) 三隅治雄(1992):風流踊と盆踊, 日本民俗学講座 4 芸能伝承, 和歌森太郎編, 朝倉書店, 東京, pp.139-140.
- 28) 三好昭一郎(1980):藩政期の阿波おどり, 阿波おどり, 徳島新聞社編, 徳島新聞社, 徳島, p.176.
- 29) 桃溪山人:三好記, 呉郷文庫, 徳島県立図書館蔵.
- 30) 三好昭一郎(1980):前掲書, pp.177-178.

- 31) 読売新聞徳島支局編(1974) : 風流踊り／盆行事の猿楽座, 阿波おどり物語, 読売新聞徳島支局, 徳島, pp. 7-9.
- 32) 松本進(1980) : 前掲書, p. 19
- 33) 日本風俗史学会編(1994) : 風流, 日本風俗史事典, K.K. 弘文堂, 東京, p. 578.
- 34) 川崎庸之他編(1962) : 風流, 日本文化史辞典, 朝倉書店, 東京, p. 638
- 35) 河竹繁俊監修(1970) : 郷土舞踊の風流, 藝能辞典, 演劇博物館, K.K. 東京堂出版, 東京, p. 581-582.
- 36) 三好昭一郎(1993) : 阿波踊り起源考-「みよしき」「春日祭祀」を分析する- “風流踊り”が源流か, 阿波踊り 第1号, 板東哲夫編, 阿波踊り研究会, 徳島, pp. 2-7.
- 37) 藝能史研究会編(1985) : 日本芸能史 第4巻, 財団法人法政大学出版局, 東京, pp. 75-76.
- 38) 三好昭一郎(1993) : 前掲書, pp. 6-7.
- 39) 桧瑛司(1987) : 踊り方教室, 阿波おどり写真集 踊らなそんそん, 徳島新聞社, 徳島, p. 215.
- 40) 同上.
- 41) 岡田寛斎(1996) : “阿波おどり”のリズム, 阿波おどり 第4号, 板東 夫編, 阿波踊り研究会, 徳島, p. 29.
- 42) 朝日新聞社徳島支局(1992) : 前掲書, p. 120.
- 43) 小島美子(1994) : NHK人間大学シリーズ 日本人の音楽感, K.K. 日本放送出版協会, 東京, pp. 4-14.
- 44) 岡田寛斎(1996) : 前掲書, p. 16.
- 45) 仲井幸二郎・丸山忍・三隅治雄編(1993) ハイヤ節, 日本民謡辞典, K.K. 東京堂出版, 東京, pp. 264-265.
- 46) 河竹繁俊監修(1970) : 都々逸, 藝能辞典, 演劇博物館編, K.K. 東京堂出版, 東京, p. 460.
- 47) 読売新聞徳島支局編(1974) : ええじゃないか／庶民の怒り爆発, 徳島, pp. 46-47.
- 48) 読売新聞徳島支局編(1974) : 同上, pp. 50-51.
- 49) 山口吉一(1931) : 阿波えっちゃんないか, 徳島土俗藝術研究所, 徳島, pp. 4-16.
- 50) 三好昭一郎(1980) : 前掲書, pp. 197-201.
- 51) 松本進(1980) : 盆踊りから阿波踊り, 阿波踊り, 徳島市観光協会, 徳島, p. 27
- 52) 三好昭一郎(1987) : 阿波おどり物語, 阿波踊り写真集 踊らなそんそん, 徳島新聞社, 徳島, p. 203.
- 53) 山本大・田中歳雄(1977) : 前掲書, p. 300.
- 54) 朝日徳島社徳島支局(1992) : 前掲書, pp. 100-101.